部会活動報告　　近現代史ゼミ部会

近現代史ゼミ・2022年9月24日の報告

―陸軍前橋飛行場と特攻・誠飛行隊（菊池実講師）―

講師の菊池実さんは日本の戦跡考古学を代表する研究者です。今回は従来の美化された特攻隊のイメージにはない事実を資料や写真を駆使して解説していただきました。

○NHKBS１スペシャル

「特攻・知られざる真実―誠隊　最後の１か月」

今年8月23日放送（昨年8月放送の再放送）され、番組完成前にも夜のNHKニュースで紹介された。私は番組制作に資料提供等の協力をした。番組の前半は九州大学浅海底フロンティア研究センターが調査を進めている米軍駆逐艦「エモンズ」についてで、同艦は昭和20年4月6日、日本の特攻機により大破し沖縄古宇利島の海底に沈んでいる。（海底のエンジンや操縦席計器板などから九八式直協偵機であることが分かり、それを使用していた誠隊による特攻と確認された。）九州大の先生は、特攻の誠飛行隊は大刀洗飛行学校（福岡県）の教官などから編成された特攻隊でかなり優秀な技量を持っていた結果、特攻に成功したなどと述べ、番組はそうしたニュアンスで放送されていたから、私はその点に違和感があった。

○陸軍前橋飛行場

『戦争遺跡の発掘　陸軍前橋飛行場』（菊池実著・2008年6月15日刊行）

私はこの本の中で特攻隊を取り上げた。調査のきっかけは飛行場跡地の発掘（西毛広域幹線道路）で、当時、私は県の埋蔵文化財調査事業団に勤務していたので希望して発掘担当者になった。その過程で、元伊香保町長の方から特攻隊の資料の提供を受け、その後、様々な情報を集めた。生存隊員の孫との交流もあった。調査は、①現地調査、②史料調査、③聞き取り調査により進めた。

○日記の入手

①「小林日誌」（誠37飛行隊長小林少尉）昭和20年1月1日～4月5日、4月6日出撃の前日までの記録

②「岡部三郎日誌」（誠36飛行隊岡部伍長）昭和20年3月25日～4月6日、4月6日出撃当日の朝までの記録。遺族から写しをもらった。

③「野村中尉の戦後の記録」（小林少尉の木脇教育隊での区隊長）

NHKのスタッフが発掘したもの。野村は誠隊を九州まで送り届け、小林とも最後の言葉を交わした。「私は何度も許せと心に詫びた」などと記述されている。

○前橋飛行場の動き

・昭和19年2月15日、未完成の滑走路に金網を敷いて飛行機が初着陸

・昭和20年2月、陸軍特別攻撃隊の訓練

○なぜ、彼らは特攻隊長（隊員）に指名されたか

全員の指名された理由は分からないが、関係者の中で語られていたことによれば各種の責任を取らされて、懲罰的な人事のような形で指名されたことが分かる。

誠36飛行隊長の住田少尉は無断欠席の責任、37飛行隊長の小林少尉は機密書類の紛失や不時着の責任、37飛行隊の柏木少尉は帰隊の遅れの責任、36飛行隊の岡部伍長は飛行訓練時の翼端破損の責任など

○前橋飛行場での特攻訓練

昭和20年3月6日から約20日間、ただし、まともな訓練はほとんど行われていない。主な任務は自分たちの食糧調達などであったし、燃料節約のため1日40分程度しか飛行できなかった。しかも発動機（エンジン）の故障がたびたびあり、そもそもまともな飛行機が提供されていなかった。使われたのは九八式直協偵機で、どうせ失われるからと老朽機が使われたようだ。

○小林敏夫少尉と誠第37飛行隊員

小林日誌によれば、彼は音楽が趣味で、自ら作詞し当時有名な作曲家であった大中寅二に作曲を依頼している。また、伊香保で疎開児童と交流し、「あどけ無き子等の吾らをしたひて集まり来る姿、涙流るる程うれしかりき」とある。この時の模様を昭和20年6月の上毛新聞は、隊員が勇ましい言葉を語っていたと報道した。しかし、関係者がずっと後に証言したところでは、隊員は「死にたくない、死にたくない」という言葉を発していたという。

新聞は読者を勇ましい言葉で鼓舞し煽っていたけれど、事実はそうではなかったということが分かる。

○誠隊出陣式（昭和20年3月20日）

前橋飛行場で行われた。『堤ヶ岡村誌』にも記録が

ある。下志津教導飛行師団長であった片倉衷の手帳にも「前橋出陣16.00」、「前橋特攻・伊香保白木屋」の記述があり、出陣式に片倉師団長が来て訓示したことは確かだ。小林日誌には「引き続き会食ありたるも、態度不可なりとの理由に依りて師団長中途にて座を立ち冷たき空気漲りたり」とある。師団長と特攻隊員との間にトラブルがあったようで、この一件が3月31日に熊本の隈庄飛行場での37飛行隊員2名の事故死にも関係しているようだ。

○岡部三郎伍長、前橋高等女学校生徒におくった一文（昭和20年3月24日）

前橋高等女学校生徒の血書の手紙に対する返書を近所の農家に託して前橋飛行場を出発。（内藤真治さん補足＝前橋飛行場に勤労奉仕に来ていた前高女4年生の細野光枝さんがマスコット人形と一緒に届けた血書への返書。）

○突撃命令、そして離陸時間は？

「4月6日命令、誠第36、37，38飛行隊は14時20分乃至15時の間に新田原を出発し…敵輸送船団に体当たり必砕すべし」との命令だが、実際には午後2時過ぎに離陸することはおそらく不可能だったのではないか。当日、新田原に来る前に熊本の健軍飛行場で試験飛行していた。翼下に100キロの爆弾をつけると沖縄まで燃料がもたない。そのため後部座席に燃料タンクを載せての訓練が必要だった。その訓練で38飛行隊の田窪曹長が墜落死している。だから新田原を離陸するまでに相当混乱したのではないか、とても命令の時間に順調に飛び立ったとは言えない。戦後、命令した参謀が「すばらしい見事な離陸をした」という正反対のことを書いていて、事実と大きくかけ離れたことが戦後ずっと語られてきた。

○岡部三郎伍長の特攻

このころの那覇の日没は午後6時50分頃、その1時間後くらいに岡部機は米輸送艦「キャスウェル」に突入した。この時間ではほとんど洋上の艦船は見えない。命令通り順調に新田原を離陸していれば明るい時刻に沖縄沖に到達できたはずだが、実際には離陸時に相当な混乱があったことが分かる。また隊員には夜間飛行経験は全くなかった。岡部機は米艦「キャスウェル」の舷側に激突、機体は飛散したが遺体は引き上げられ、鉢巻き（血染めの鉢巻き）は米軍人が持ち帰り、戦後、日本の遺族に返還された。現在は知覧特攻平和会館に展示されている。

○アメリカ軍の対応

米軍は日本側の無線を傍受し解読して、いつ特攻があるのかを把握していた。そのためそれに対応する措置をとっていたし、それをかいくぐった特攻機がいた場合は、突入を防ぐため猛烈な弾幕で阻止した。だから、実際には、ほとんど特攻は成功していない。

○36人の隊員消息（1隊は12人だから3隊だと36人、20代の若者たち）29名戦死、3名が事故死、生還者4名

○生還した隊員は

①原田伍長（38飛行隊）、沖永良部島に不時着、陸軍の記録には後部座席の燃料の切り替え失敗のよるとされているが、実際は違うのではないか。上層部に対する反発があったとの証言（孫の証言）もある。

②春島少尉（37飛行隊）、奄美大島出身、すぐ隣の喜界島に不時着

③崎田伍長（38飛行隊）、再出撃するも不時着

④安部伍長（38飛行隊）、再出撃するも不時着

崎田、安部は何度も出撃して不時着している。完全に特攻を拒否していたのではないか。

※原田、崎田、安部は軍の飛行学校出身でなく、民間の操縦士養成所出身

※生還した隊員は隔離施設の福岡振武寮に収容され「お前たちは死んだ人間だから」と外部との接触を断たれた。そこの参謀が相当な仕打ちを彼らにやったらしい。生還隊員の中には恨みを抱く者もいて、参謀は最後まで仕返しを恐れて護身用のピストルを持っていたという。

○事実と情報

私たちが接する事実は情報化された事実、その事実は記憶されあるいは忘却される。そこに利害関係者による捏造（虚構）や隠蔽（抹殺）が行われる。それが記録されあるいは語り継がれ情報とされる。私たちはそれに接するわけで、その中に捏造や隠蔽が必ず含まれる。だから、事実の検証が重要なのだ。

○これまで特攻隊について語られたのは戦死した人のことについてである。実際は沖縄に行く途中の島に不時着した特攻機は多い。そして、生き残った人たちは戦後ほとんど自分の事実を語っていない。それを取り上げるところもほとんどなかった。だから、戦中も戦後も長い間、特攻戦死者を美化するような風潮だった。私は誠隊について調べたが、別の隊を調べると、おそらく色々な事実が分かってくると思う。

―文責・設楽春樹―